

●二人で味わう古典和歌(42)

松まつがへ反りしひにてあれかもさ山田やまだのの翁おきながその日に求めあはずけむ

大伴家持

『万葉集』巻第十七「放の免がれたる鷹を思ひて夢見、感悦よろこびて作る歌一首并せて短歌」より。家持が愛してやまなかつた鷹狩り用の鷹を、飼育係の老人・山田史君麻呂が逃してしまった顛末を喜怒哀楽を噴出させながら叙べた、長歌と反歌四首の構成。掲出歌は反歌の第三首目。

「鷹はしも あまたあれども 矢形尾やかたをの 我が大黒おほくろに
大黒といふは蒼鷹おほたかの名なり 白塗しらぬりの 鈴取り付けて」(一口に鷹と言うけれど、矢の形をした見事な尾、「大黒」と名付けた私の鷹、白塗りの鈴を付けて)と長歌のなかで詠まれる家持自慢の鷹。ところがこの後、意外な展開をする。
「狂たふれたる 醜しこつ翁おきなの 言ことだにも 我われには告げずと
の曇り 雨の降る日を 鳥獵とりがりすと 名なのみを告りて 三島みしま
野を そがひに見つつ 二上ふたがみの 山飛び越えて 雲隠くもかくり翔かけ
り去いにきと 帰り来て しはぶれ告ぐれ(後略)」(間抜け

なるくでなしの爺おやい一言も私には断りなしに、空一面に雲がかかって雨が降る日なんぞに、他の者に「鷹狩りします」とほんの形だけ告げて出かけ、その挙句に「大黒は三島野を後ろにしながら、二上の山を飛び越えて雲に隠れて飛んで行ってしまいました」と、帰ってきて息せき切つて告げる始末)。

愚かにもみすみ鷹を逃してしまった老いぼれの鷹匠に對する怒り。鷹が逃げってしまった報告を受けた際の嘆き、狼狽ろうたいぶり。そしてこの後、鷹を思うあまり夢のなかに一人の娘が立ち現われ、「必ず帰ってきますよ」と告げるのである。全文引用できないのが残念なほど、生々しくおもしろく、これがあの孤独の歌人家持かと驚く。

冒頭の反歌では「松の梢に戻ってしまふ間抜け鷹のように老いぼれてしまったせいなのか、山田の案山子爺あやうぢいがその日のうちに探し出せなかったとは」と詠む。

物語性の強い長歌は美しく躍動的なリズム。一方、この反歌は怒りに震える棘あるリズム。家持はおもしろい。



(小島なお)